

記憶における回心

アウグスティヌスの『告白』1巻から9巻における記憶の意味

小川 量子

序

『告白』は、数あるアウグスティヌス（354年～430年）の著作のなかでもとりわけ彼の人間性を如実にあらわす書であるとともに、彼の霊性と哲学が解け合う独特な境地を示した作品である。その1巻から9巻まではアウグスティヌスのキリスト教への回心の記憶を語るものとしてよく読まれるが、10巻からは新たに回心後の現在の自己について語り始め、最後の11巻から13巻は「創世記」の創造の聖書解釈となっている。そのため、告白という形式上の一致はあっても、徐々に継ぎ足されていったようにも見え、全体の構造が捉えがたい。しかし、10巻の始めにかなり長く論じられている記憶についての考察と11巻の時間についての考察とは、いずれも主題の変わり目に置かれ、前後の部分を連結する役割を担っていると考えられる。すなわち、記憶論は過去の自己から現在の自己への、時間論は自己の記憶からこの世の歴史性への思考の転換点にあって、それぞれの面を照らしだす観点を示している。

記憶と時間とは、いずれも『告白』全体のテーマに関わる重要なモチーフであって、たんに便宜的に取り上げられたトピックではない。というのも、記憶論と時間論は、互いに相補うように、異なる角度からこの世における自己の在り方を問題化しているからである。すなわち、記憶論では、記憶に内在しつつ神へと超越する可能性が探求され、時間論では、時間とともにこの世へと分散してゆく意識の悲慘に光があてられる。そもそも告白とは、自己の記憶に基づいて語ることであり、それ自体時間のなかで行われる打ち消しがたい行為でもある。それゆえ、アウグスティヌスの『告白』は、自らが生きる時間の意味を、自己の記憶のうちに新たに探求していく時間を通して主題化した作品と言える。すなわち、時を介して、時のなかにある自己を捉えなおす場を自己に開くものが記憶なのである。

そのため、『告白』は、記憶なしには全体となりえない音楽のように、読者の記憶のなかで個々の部分が互いに響き合いながら、根本的な主題を繰り返し、より明確になるように展開していく。すなわち、『告白』のいかなる部分も永遠なる神に対する呼び掛けとして、時間のなかで時間を超越する方向を示しつつ、最後には「創世記」を通して時間の始まりと終わりに光をあてることによって、永遠的な観点から我々の

生きる時間の根源と全体を捉えなおすのである。その意味で『告白』はどの部分を読んでも全体の主題が浮かび上がるという稀有な特徴をもっている。そこで今回は、第一部の過去の記憶の告白に、記憶と時に関する彼の洞察がいかに現れているかに注目しながら、読みなおしてみたいと思う。

1. 告白の時

ひところ自分史というものがはやったが、アウグスティヌスは『告白』で自叙伝を書こうとしたわけではない。『告白』は自己における神への関係を自らの記憶のうちに問いなおそうとしたものであって、たんに自己の歴史記述をめざしたものではないからである。それはちょうど「福音書」が、この世に生きたイエスの歴史的な記録に尽きるものではなく、イエスの存在の意味を人々の記憶のうちに呼び起こす、弟子によるイエスの記憶の書であるのと似ている。シャルル・ペギーが『歴史との対話－クリオ』(山崎庸一郎訳 中央出版社)においていみじくも指摘しているように、「歴史」は出来事に沿ってそれを記載し、集録するが、「記憶」は出来事の内部に留まり、その核心へさかのぼろうとするのである。アウグスティヌスにとって自らの記憶の中心に位置づけられる出来事とは、神に対する回心 *conversio* という出来事であり、『告白』のすべては回心の意味を記憶において問いなおし、伝えるために書かれたと言える。

アウグスティヌスの回心は33才の時の出来事であり、『告白』はそれから十年ほどたって書かれたものである。十年という歳月は自らの経験の意味を記憶のうちに掘り起こすのにちょうどよい隔たりを与える。彼はすでに40代の半ばであり、もはや若くはないが、まだ老いてもいない。若いうちは自らの記憶の意味を問いなおす余裕も蓄積もあまりない。自分の歩むべき道がすでに定まり、精神力が最も充実する40代の半ばは、当時の捉え方では壮年期の終わりで老年期の始まりでもあるが⁽¹⁾、まだひたすら過去を振り返り、思い出にふけることに喜びを感じるわけではない。このような時期に、すでに失われた青春の意味を捉えなおすことは、これから迎える老年を意味づけることでもある。アウグスティヌスも『告白』において、たんに過去の思い出を再現しようとしたのではなく、未来に向かう現在の自己が記憶すべきことを新たに問いなおしたのである。記憶によって過去は現在に結びつけられるが、過去は未来を照らすものとして現在に意味をもつのである。そのため『告白』は、若い頃よりも人生の半ばにさしかかった頃にこそ共感を与える書であるかもしれない。

2. 告白の意味

『告白』は、アウグスティヌスが自己の記憶をプライベートなものとしてではなく、公にしたものである。彼にとって告白するとは、神の前で告白することであるとともに、『告白』を読むすべての人の前で告白することであったからである。神に告白することは、神に何かを教えることではなく、むしろ神に知られているような、ありのままの真実な自己に近づくこうとする行為であり⁽²⁾、「神から自己について聞く」ことにほかならないと理解される⁽³⁾。すなわち、神への告白において、自分が語ることと神から聞くこととは一体となり、語ることによって聞き、聞いたことが語られる。そこには、神に問いかけ、答えを自らのうちに発見していくプロセスが示されている。人は語ることによって初めて自己が何を認識しているのかを捉えなおすことができるように、語ることは自己の言葉を通して自己の内奥から出て来る洞察に耳を傾けることでもある。こうして告白は、自己の認識の根源から自己を自己に認識させる行為となる。したがって、アウグスティヌスにとって告白は、神の前に自己を捧げる行為であるとともに、神によって自己が新たに照らされる行為であり、神との交わりのなかで自己が刷新される行為であった。

一方、他者に対して自己を語ることも、他者に自分のことを教えるためではないと述べている。彼の告白が真であると信じるしかない他者にとっては、彼の告白が真実かを知ることが目的ではなく、彼の告白を聞く者自身が神の救いに希望をもち⁽⁴⁾、彼の善を自らの善のように喜び、彼の悪を自らの悪のように悲しむ兄弟愛をもつためであると語っている⁽⁵⁾。告白はどんな場合であれ、互いの愛を前提し、確認する行為であり、誰でも本当に信頼している人にしか告白できないし、本当に愛する者だけが相手の告白を受け止めることができる。アウグスティヌスが告白したのは、神の愛を共有する共同体を信じるからであり、彼の告白を通して互いの愛が本当のものとなるためであった。

当時の教会には、元マニ教徒で有能な弁論家であった彼を警戒する者がいなかったわけではなく、彼の告白は自らが真のキリスト教徒であることを証明するという意味ももっていたと考えられる。しかし、彼は自己弁明という形を取らずに、自己の善を語るのもそれを神の善に帰すためであり、自己の悪も自らの罪として示すのである。

「私の善はあなたのなせるあなたの賜物であり、私の悪はわがあやまち、あなたの裁きです。」(Ⅹ, 4, 5) 過去の自己の罪を罪として認めることは、すでにその罪のうちにない現在の自己を認めることでもあり、罪の告白もそれを可能にした神への讃美になる。このような告白によって、個人の記憶は共同体全体の記憶となり、教会は個々人

における神の記憶を共有する場となるのである。すなわち、彼にとって教会は、すべてにおいてすべてを貫く神の記憶が普遍的に分かち合われる場であった。

ただしアウグスティヌスは『告白』を彼の教会に対してではなく、人類に対して書いたと述べている⁽⁶⁾。それは彼の記憶が、個人の記憶に限られない意味を人類全体に対してもつと考えるからである。すなわち、アウグスティヌスは、自己を特別な人間としてではなく、神の前にある一人の人間として描くことにより、すべての人間が置かれている条件に光をあてようとしたのである。そのため、彼の告白は、その文化的、時代的な差異を超えて、読者自身が自らの記憶を掘りかえし、その意味を捉えなおすことを可能にするものであり、我々自身の自己認識の道と重なりうる面を多くもっている。

3. 忘却された時期

『告白』が記憶の書であるとしても、そのすべてが彼の記憶に基づくわけではない。『告白』の始めに書かれた幼年期は、ちょうど『告白』の終わりに取り上げられる「創世記」が人類の歴史に先立つ過去であるように、おそらくすべての人間の記憶に先立つ過去であろう。記憶にないということ自体、現在ある記憶を通してしか知りえないことではあるが、アウグスティヌスはこの時期を忘却の闇に包まれた時期として、「この世に生きている自分の生涯に数えることにためらいを感じる」(i, 7, 12) とさへ述べている。それは、10巻の記憶論で論じられる「忘却の記憶」もなく、何を忘却したのが全く忘却された過去である⁽⁷⁾。そのため、アウグスティヌスはこの人生の始まりの時期をすでに死んだ時と語っている⁽⁸⁾。

我々がいかに生まれたのかを知るのは家族や身近な人であり、自己の幼年期については他人の記憶を信じるしかない。この世に生きることは、他者の記憶を自己の記憶に受け入れることでもある。ここで、アウグスティヌスは自己の存在をどこまで先にさかのぼりえるかを神に問いつつ、すべての時間に先立つ神の存在の考察へ向っている⁽⁹⁾。こうして自分に関するアウグスティヌスの最初の告白は、自己に存在と生を与えた神に対する讃美となり、『告白』の中で最も重要なテーマである「創造」がここに端的にあらわれる。アウグスティヌスは自らの存在の始まりにおいて自己の存在の根源である神との接点を見るが、このことは創造主である神への回心がなければありえなかったことである。彼にとって神を自己の創造者として受け入れることは、自らの存在を端的に善いものとして受け入れることでもあったのである。その意味で、彼の回心は自己の存在の意味を自らの記憶のうちに回復する出来事であった。すなわち、

回心によって、存在の根源である神は、存在することの意味を自己に与える存在として記憶されたのである。

アウグスティヌスはここで幼児の精神的発達にも言及している。彼は幼児を観察し、幼児は自己を空間において把握することができるようになり、自己の意志をなんとかあらわそうとして手足をばたつかせると理解する。すなわち、自己の内にある意志と感覚的な像によって把握される外界との区別がかすかに意識され、身体活動や感情表現によって、自らの意志を外の人々に伝えようとしていると解釈するのである⁽¹⁰⁾。このような人間の始まりにおいて、すでに意志の存在が認められている。幼児の身体言語は「全民族に共通する自然の言語」として、言語習得の前提のように考えられ⁽¹¹⁾、幼児は語りえぬもの *in-fans* と呼ばれても、言葉の生まれる土壌は幼児のうちにすでに用意されていることが観察される。

アウグスティヌスはこのような幼児のうちにも、我がままとそこから生じる妬みといった我々の罪の原型を読み取るが、自分の罪として告白するわけではない⁽¹²⁾。幼児が語りえぬ存在であるように、幼児期の罪を告白することはできないのである。幼年期にも自己の意志はあったとしても、自己の意志として記憶されてはいないからである。したがって、幼年期の罪は幼児を外から観察することによって、すべての人間に共有されると推測せざるをえない罪をあらわしている。幼児の罪は大人になれば、表面的には見えなくなるものではあるが、自らの内なる罪を知る大人だけが幼児のうちに自らの罪のルーツを見ることができる。それは他人の罪でありながら、自分の罪と全く無関係であるとは言いきれないものである。このように時間的に自分よりも後に生まれてくる者に自分の先立つ過去を見るという関係によって、世代と世代は結びつけられる。そこから人間であるかぎり他人の罪もそのルーツにおいて自らの罪と共通するものとして捉えなおし、それを共に引き受けていく連帯性も生じてくる。それを気づかせるのは、何も語れぬ幼児なのである。

4. 学習と遊びの時期

少年期の罪については自らの記憶を通して語ることになるが、アウグスティヌスが少年期の初めに語るのは、少年であった自分が経験した大人たちの罪である。なかでも学校の教師に対する批判は厳しく、辛辣である。「私たちは遊ぶのが好きでしたので罰を受けました。もっとも私たちを罰したご当人も、実のところ同様の遊びごとにふけていたのですが、でも大人の遊びはお仕事と呼ばれます。」(I, 9, 15) 教師の体罰が教師自身の欲求のはけ口のように見えたのだろう。人を人とも思わない教師の振る

舞いを子供は忘れない。彼は当時の教育方法だけでなく、教育内容に対しても非常に批判的である。それは子供の知るべくもない大人の情事を暗示する文学であったからである⁽¹³⁾。

アウグスティヌスは無理やりさせられる勉強を嫌い、見世物を好んだが、見世物もまた大人の社会の矛盾をあらわすものとして捉えられている。「親たちは見世物で勉強が妨げられでもすると、子が鞭打たれるのを喜んで許します。しかもその勉強によって親たちが望んでいるのは、子供がいつか見世物を催すような身分になってほしいということなのです。」^(14, 10, 16) 親の願望は今も昔も変わらず子供の出世であり、それは親の野心を反映したものであった。アウグスティヌスの父親も、記憶力と弁論の才に秀でていた彼の教育に乏しい財産のすべてを注ぎ込んだので、彼は親の期待に応えて勉強せざるをえなかったのである。確かに、強制されなければ学ばなかったことは悪かったとしても、その結果身についた学習自体は自分にとって益であったとして、神に感謝している⁽¹⁴⁾。

このように子供時代に経験したこの世の悪に言及しつつも、だからといって子供は罪のない無垢な存在であると考えたことはない。子供の欲望の対象は大人のそれとは規模が違っただけで、罪の実質は同じだと考えている。「天国は幼な子のような者たちのものである」⁽¹⁵⁾というキリストの言葉も、子供の小ささが神へのへりくだりの象徴となる以外には理解できないと述べている⁽¹⁶⁾。アウグスティヌスが子供にも大人と同じように罪があると言うのは、子供の罪が大人の罪のようだと言おうとしたのではなく、大人の罪が子供の罪と似たようなものだと言われている文脈から理解すべきであろう。大人はしばしば子供のうちに天使を見たいと望むが、そこには大人である自分の罪を忘れたという安易な逃避が含まれていないとは言えない。子供の罪も大人の罪と同じく罪として捉えることは、子供時代の罪を大人の罪に連続するものとして記憶のうちに関係づけることである。子供はまだ罪を罪と知らずに犯すが、大人は子供の時の罪も罪として確認できる存在だからである。その意味で大人が自らの子供時代の罪を思い出すことはそれ自体神の前にへりくだることになる。自分の子供時代の罪を忘れれば、子供に対して厳しくしすぎるか、甘やかすことになるだろう。人は往々にして子供の時にされてきたことを大人になって繰り返してしまうが、子供時代の罪を思い出すことは、同時に大人たちの罪を思い出すことでもあり、それはこの世の悪循環を断ち切るという意味をもつのである。

5. 愛を求める時期

『告白』において、最も長く語られ、最も興味をそそられるのは青年期の告白である。思春期から始まる青年期は、誰にとっても最も不安定な時期であり、自己の理想を探し、自ら人生を形成し始める時である。アウグスティヌスは自己の青春を情欲の茨が生い茂る時期として特徴づける。情欲は、回心に至るまで彼を悩ませる原因になるが、それは情欲それ自体が罪であるからではなく、人格的な愛を求め始めた彼を迷わせるものだったからである。「私を喜ばせたのは、愛し愛されること以外に何があったのでしょうか。けれども節度をもって心から心へ向かう友情の明るき道を踏み外し、泥でぬかるんだ肉欲と発情期の泡立つ滝からたちこめる霧が私の心を覆い曇らせ、ついに愛の晴朗さと情欲の幻惑とを区別できなくなったのです。」（11, 2, 2）

アウグスティヌスを情欲による罪へと誘う要因は、たんに彼自身の性欲だけではなく、まわりの大人たちの無頓着と同年代の仲間づき合いにあったと回想される。「私は仲間たちが自分の破廉恥な行為を誇らしく語り、その不品行が大きいほど自慢するのを聞いていましたので、たんに行為に対する欲望のみでなく、賞賛に対する欲望からも喜んでそれをしたのです。悪徳こそ非難されるべきですが、私は非難されないようにますます悪徳を行うようになったのです。そして墮落した者たちにひけをとらないような罪がない場合には、やらないことまでやったようなふりをしました。それは仲間にくじなし、くだらないやつと思われたくないからでした。無垢であるほどいくじなし、純潔であるほどくだらないやつと思われたからでした。」（11, 3, 7）確かにこのようなことは現代にもよくあることで、自己の確立していない未成年は、仲間と同じことをしなければ笑われるという仲間うちの雰囲気のにまれやすい。また大人になっても自らの悪を仲間に誇る者はいる。彼はそこに「告白」の転倒されたかたちを見い出すのである。

青春の始めの罪として描かれる、夜中に仲間と梨の実を盗んでふざけ合った思い出も、この連関で理解できる罪である。禁じられた行為を共にすることで互いにスリルと連帯感を感じたかったのである。そこにはまだ自ら悪いことをするという自発的な悪意はないが、意味の欠乏と存在の破壊という罪の特徴だけが明確に浮かび上がる。

「何という非友情的な友情よ。わけの分からない精神の誘惑よ。遊びや冗談から、ものを損ないたい熱望と他人を傷つけたい欲求が生じてくるとは。」（11, 9, 17）まだ自分の価値観ができていないので、社会の価値観を逆転させ、破壊的な行為を行うことで開放感を味わおうとするのである。ここには思春期に特有な、歯止めのきかない欲求の暴走がある。アウグスティヌスはこれを自分の青春の原像として印象的に記憶する。

当時の大都市カルタゴで勉学を続ける頃になると、恋に恋するようになる。この時期には、盗みのような外的な行為に欠乏が現れるのではなく、自己の内に欠乏が直接感じられてきたのである。彼は現実にはまだ誰も愛しておらず、愛に対する自己の欠乏感が、真に愛すべき対象を愛していないという欠乏によることにもまだ気づかず、ただ欠乏感を募らせたのである。「隠れた欠乏によって、欠乏の程度が足りない自分を憎んだのです。」(III,1,1) ここには、自己の欠乏感の度を増すことが愛の激しさと思われた青年期の恋愛観が、自己の内的な欠乏を真に癒しうる存在を現実にあつてに至った回心後の愛の理解から捉えなおされている。青年時代、欠乏として感じられた愛は真の愛ではなく、愛の欠乏にすぎず、そこには自己への憎しみが含まれていたことを洞察するのである。このような欠乏感も、神の愛に対する自己の本質的な欠乏の現れとして捉えられるが、その欠乏のあまりかえって神を求める気が起こらなかったと述べている。

こうしてアウグスティヌスは自己の欠乏を満たすために愛する相手を求めることになるが、それとともに自分がどう見られるかを気にする自意識が強くなる。「自分が汚れて下劣な者のくせに虚栄心にあふれ、優雅で洗練された人間であるようなふりをしていました。」(III,1,1) このように自ら演技をすることで自己を偽り、自己の内面と外面の分裂を深めていく。かくして彼は望んでいた恋に捕らえられ、16才で「思慮を欠く落ち着きのない情熱にかられて見つけた相手」(II,2,2)と語られる、一人の女性と同棲し、すぐに一人息子が誕生するのである。この関係は、愛される喜びと愛する苦しさの絡み合った関係として記憶される。「私は愛され、ひそかに享楽の絆にかかり、悩み多い関係のうちに喜びながら縛りつけられ、妬み、疑い、恐れ、怒り、いさかいなどの燃えるような鉄の鞭でしごかれる身となりました。」(III,1,1) 彼はついに愛を得たと思いきや、その愛はまさに愛の欠乏であつたことを思い知らされたのである。

このような恋愛関係のただなかにあつたアウグスティヌスにとっては、悲劇が唯一の慰めとなった。劇中で演じられる架空の恋愛に同情し、悲しみを感じることの快感について反省をめぐらす。虚構の人物に自己を投影し、その不幸をあわれむのは、自分が実際にあわれな者となり、悲しみたくはないことの裏返しであつて、そのような心理こそ本当はあわれむべきなのだと捉えるのである。現実の恋愛から逃避して架空の恋愛との一体感に浸っている過去の自分を、現在の自分は厳しくかつあわれんで見ているのである⁽¹⁷⁾。すなわち、記憶においては、過去の自分を背後からいかなる感情移入もなしに見ることができ、過去の自分が気づかなかつた内的な分裂と倒錯が分析

される。演技する者に自分を重ね、自己陶醉するという段階は、他人に対して演技するという前の段階に比べて、現実とまったく関わらずにすむという点で、現実を忘れる度合はさらに進んでいると言える。

このころ彼は修辞学校で首席となり、乱暴なグループからは離れていく。キケロの『ホルテンシウス』という本を通して哲学に出会い、知恵を求める人生にあこがれたのもこの時期であった。通称「ホルテンシウス体験」と呼ばれるこの出来事は、アウグスティヌスの人生を大きく変える出来事として記憶され、その後何度も思い出されることになる。「この書物は私の気持ちを変え、主よ、あなたご自身へと私の祈りを向け、願いと望みをこれまでとは別のものにしてしまいました。突然すべてのむなしい希望がばかげたものになり、信じられないほど熱烈な心で不死の知恵をもとめ、立ち上がってあなたの方に戻り始めたのです。」(III,4,7) このようにアウグスティヌスにとってこの体験は回心の前触れとして意味づけられているが、それはその時点では気づかれず、回心によって初めてそのように捉えなおされたのである。その意味では彼の無自覚的な回心であったが、後の回心の契機となる重要な記憶となる。

彼はキリスト教のうちに知恵を探すが、キケロの文章に比べて聖書の文体の稚拙さに躓き、信仰よりも知恵を標榜するグノーシスのマニ教に入信してしまう。情欲と情念の嵐の中にあって、それにわずらわされない知恵の生活こそが彼の理想となり、世間的な知恵を超えたものにあこがれる宗教的な渴望も強く出てきたのであろう。彼は何よりも自らの生活を方向づけ、人生を意味づけるものを求めていたと言える。その点でマニ教は、極端な禁欲生活を理想としており、当時のアウグスティヌスには、それが自分には手の届かないものであればあるほど、神々しいものと見えたのであろう。かくして彼の現実逃避願望は満たされたが、当時の彼には、肉体に悪があるというマニ教の教えこそ、肉欲に縛られていた自己の現実をずばり言い当てているように感じられたのである。

「愛し愛される」ことを何よりも望んだ彼の青春時代を締めくくる事件として忘れてはならないのは、ある友人の死の経験である。彼は幼なじみで、勉学の友であり、心が一つと思えた親友であった。当時アウグスティヌスは20才であり、故郷タガステで修辞学教師となっていた。アウグスティヌスは友を熱心にマニ教に誘うが、彼は病中意識なきままキリスト教の洗礼を受け、それを嘲笑したアウグスティヌスを厳しくとがめて死んだのである。彼の死によって、アウグスティヌスは茫然自失し、「自分が自分にとって大きな謎となる」(IV,4,9)ほどの深い悲しみにとらわれる。友人の死を通して、彼は死を自分の身近に感じ、死の恐怖におちいるとともに、すべて可死的

なものが生きていることを不思議に感じるようになる。彼はここで初めて死という現実のもつ力に圧倒されたのである。その力の前でマニ教の神は助けにならなかった。この体験は、「死すべきものを死なないものであるかのように愛する」(IV, 8, 13) むなしさを彼に実感させ、人間的な愛の限界が死にあることを記憶させたのである。いくら友を愛していても、自分も死にたいとは思えなかったからである。

彼は友人を思い出させる故郷の地にはいたたまれず、カルタゴに戻るが、記憶と時のもつ不思議をも体験する。彼は友の記憶を伴う場所を逃れることで悲しみの記憶から遠ざかろうとしたが、真に彼の悲しみを癒したのは時間であった。「時はむなしく休んでいるのではなく、なすこともなく我々の感覚を通して過ぎ去っていくのでもありません。それは心のうちに不思議な業をなすのです。」(IV, 8, 13)

6. マニ教と新プラトン主義

ここまでのアウグスティヌスの体験は、ごく普通の人の体験とほとんど変わらない。ごく普通の体験をあらためて取り上げている点に彼のユニークさがあると言えるかもしれないが、マニ教から抜け出るという体験はアウグスティヌス個人の思想的な歩みを決定する第一歩と言える。マニ教は、この世と神、肉体と精神を対立的に捉える二元論であり、物体が悪であるので、悪であるこの世を創造した神を神とは認めないし、救い主であるキリストが肉体をもつことも認められない。また、何人も妻をもち、動物を犠牲とするような旧約聖書の神の義人を倫理的な意味で義人とは認めない。このように旧約聖書を否定し、新約聖書を部分的に自らの解釈に合うようにアレンジして取り入れるマニ教は、当時ヘレニズム世界に蔓延していたキリスト教の異端グノーシスであり、キリスト教のもつ歴史性を切り捨て、すべてを単純な対立図式で判断する一方、新たな宇宙論的神話とそれに基づく神秘的儀礼および複雑な行動規制を作り出していた。

アウグスティヌスは19才から九年間マニ教に聴聞者として関わったが、マニ教のキリスト教批判に対抗することができなかったことを入信の理由に挙げている⁽¹⁸⁾。こうしたマニ教の影響のもとで、アウグスティヌスは神を物体と同様に空間に広がるものとして、感覚的にしかイメージできなかったと回想している。すなわち、物体との対立関係のなかでしか神が捉えられないので、神はこの世の悪にさいなまれる有限的な存在となるが、悪の根源ではなく、空間に限定されない点で無限性をもつからよいと妥協していたと語られる⁽¹⁹⁾。しかし、次第にマニ教に対して様々な疑問が生じ、それをマニ教の権威者に問いただしても十分な解決が得られなかったこと、そのマニ教

の権威者の学問的教養のレベルが彼よりも劣っていたことなどから、マニ教から次第に離れることになる。キリスト教以上の知恵が教えられると思ってマニ教に入ったのに、求める知恵も知識もないことが明らかになれば、もはやマニ教にとどまる理由はなくなったのである。

やがてミラノの国立修辞学校の教授となり、その地で司教アンブロシウス（c. 339年～397年）から聖書の比喩的解釈を聞き、キリスト教について今までもっていた誤解が解けていくことになる。しかし、マニ教が信じられないからといって、キリスト教にすぐに乗り換えることはできなかった。「いったん悪い医者にかかってひどい目にあうと、善い医者に身をゆだねることがこわくなるように、私の魂の健康は信じなければ決して癒されることができなかったのに、偽を信じることを恐れて治癒を拒否し、御手にさからっていたのです。」（VI, 4, 6） こうして、何も信じることができなくなったアウグスティヌスは、真理発見の望みを失い、アカデミア派の懐疑主義に近づく。しかし、後に『アカデミア派駁論』で述べられるように、アウグスティヌスにとって、真理の存在が信じられないことは真理の探求を不可能にし、結果的に知恵への愛である哲学を断念することに通じると考えられたのである。

ここでアウグスティヌスは、かつて『ホルテンシウス』を読んだ時の自分を思い起こすことによって、真理の探求へと自己を再起させるのである。「私はつらつらと過去を顧みて実に驚きました。初めて知恵の探求熱に燃え、知恵を見つけたならば、むなしい欲情に関わるつまらない希望や愚かな欺瞞は一切かなぐり捨てようと決心した19の歳から何という長い年月がたってしまったことでしょう。しかも私はもう30だというのに、あいかわらず同じ泥沼の中にはまり込んで、気を散らすはかない現世の享楽を求めているのです。」（VI, 11, 18） 彼はマニ教入信に先だつ哲学との出会いを思い出すことで、真理探求の希望を回復し、自らの魂の救いのために時間を取ろうと決心するのである。ここでも彼にとって真理の探求は、自分自身の生活の変革を伴うものとして理解されていたことが分かる。こうして彼は再びキリスト教に近づいていくことになる。

その彼にとって、どうしても解決しなければならない問題は、「悪はどこから生じるのか」という問いであった⁽²⁰⁾。彼にこの問いに対する新たな局面を開いたのは、新プラトン派の書物であった。悪を實在として捉えるマニ教では、悪を實在させるものも悪と考えられるので、悪の究極的な存在根拠を問う「悪はどこから生じるのか」という問いには答えられない。しかし、悪が實在すると考えなければ、その問いは意味をもたなくなる。悪を究極の善からの段階的な善の欠如として捉える新プラトン主義

は、悪を善と対等に対立する実在としてではなく、善から必然的に派生するものとして理解する。そのため、存在するかぎり善であり、悪はそれ自体では存在しないものと理解される。このような悪の存在論的理解は、アウグスティヌスに、すべての存在は善いものとして神に創造されたというキリスト教の理解を可能にする思想として受け入れられる。

さらに、新プラトン派の哲学はアウグスティヌスの精神を精神の内奥へと立ち返らせ、自己の精神を超えた存在に向かわせることになる⁽²¹⁾。マニ教において精神は、肉体との対立関係からしか理解されず、神と区別されないことから、神を認識する精神というような仕方では神に対する自己が主題化されない。すなわち、マニ教では神も精神もそれ自体としては理解できないものであった。新プラトン主義によって彼は、自己の精神を永遠の真理を認識する可変的な存在として捉えなおし、神認識だけでなく、精神としての自己認識を獲得することにもなったのである。

新プラトン主義による神認識はアウグスティヌス自身の神体験として記憶されたが、その体験はそのような神認識に自己が留まらないという挫折感を伴ったものであった。「驚いたことに、私はすでにあなたを、その幻影ではなく、真実のあなたを愛し始めていたのです。しかし私の神をいつまでも味わっていることができず、その美しさによってあなたのほうに引き寄せられるやいなや、自分自身の重さによってつきはなされ、うめき声をあげながら下界に転落していったのです。その重みとは肉の習慣のことです。しかしあなたの思い出は自分のうちに留まりました。」（VII, 17, 23）哲学的に神を捉えなおすことはできても、その認識によって自分の生活は以前と変わりようもなく、この世の様々な思いわずらいと肉欲の習慣に苦しめられていたからである。さらにこのような哲学的な神認識を得たことで、自分がますます傲慢になっていったと反省する。

後から顧みて、アウグスティヌスは自分がキリスト教よりも先に新プラトン主義に出会ったことはよかったと考えている。というのは、「それらの本から受けた感銘が記憶に刻みつけられた後にあなたの書物に慣らされ、あなたの癒しの手によって傷の手あてを受けた時、僭越と告白との間にいかに大きな相違があるか、ゆくべき方向を知りながらそこに到るべき方法を知らない人と、至福に導いて、それを眺めるだけでなく、ついにそこに住まわせる「道」である方との間に何という相違があるかを、はっきりと識別する」（VII, 20, 26）ためであったと理解するからである。もしキリスト教徒になってから新プラトン派の哲学を知ったとしたら、信仰を捨てることになったか、哲学だけでも信仰と同じ状態に至れると思ったかもしれないとまで考えている。これ

は彼にとって新プラトン主義がいかに魅力を持ち、重要性を持っていたかを物語るものであるが、アウグスティヌスはここに時の順序の神秘を感じ、自分に対する神の摂理を読み取るのである。自己が出会い、記憶する出来事の順序を自分で決めることはできないが、彼はその順序のもつ意味を記憶のうちに捉えなおすことができたのである。

アンブロシウスをはじめ、当時のキリスト教の知識人のほとんどが新プラトン主義を知り、積極的に取り入れていたので、教会におけるその影響力は大きかった。アウグスティヌスも、新プラトン主義によって決定的にマニ教から離れ、キリスト教を受け入れる理論的な準備がなされたのである。しかし、彼にとって新プラトン主義による神認識はかえって自己と神との間にある深淵に気づかせるものだった。このことから彼を苦しめた悪の根拠の問題は、この世における悪の問題としてではなく、神から遠ざかる自己自身における悪の問題として捉えなおされるのである。

自分の内に神に向かおうとする意志とそれに抵抗する意志との対立があることを彼が理解することになるのは、聖パウロの書によってである⁽²²⁾。このような自分の意志の分裂状態に気づくことで、彼は自己の罪に直面することができるようになったのである。マニ教では、自分の悪を肉体のせいにしてきたので自分の意志による罪を捉えることはできなかった⁽²³⁾。アウグスティヌスは、パウロを通して自分の罪が自分の意志によることを理解するとともに、そのような分裂の状態にある自己の意志を解放するものは自分の意志ではないことも自らの体験を通して理解することになるのである。

7. 回心

こうしたアウグスティヌスに回心へのきっかけを与えたのは、他者の回心の思い出であった。アウグスティヌスはとうとう自分の悩みを打ち明け、助言を求めずにはいられなくなるが、アンブロシウスは多忙であったので、アンブロシウスの霊的父でもあったシンプリキアヌス（?～400年）を訪ねたのである。ここでアウグスティヌスは、初めて教会人に告白をしたことになる。シンプリキアヌスは、修辞学者で新プラトン哲学の造詣が深く、すでに老年で人格的に尊敬された人物であった。アウグスティヌスは彼から、彼の昔の友人ウィクトリヌス（281/291年～365年以降）の思い出を聞かされるのである。ウィクトリヌスもまた修辞学者で、新プラトン哲学の書物をラテン語に翻訳し、アウグスティヌスは彼の翻訳で新プラトン哲学に接したと言われる。彼はローマの名誉市民でもあったが、自らの名誉も顧みず、皆の前でキリスト者であることを告白し、修辞学校の職をも免職したのである。この話は、アウグスティヌスに

強い羨望の念を起こさせたが、それができない自分の状態を意識させることになる。あまりにも彼の回心を期待して話された、彼と同じような教養人の回心談は、かえって彼に自己との内面的な相違を強く印象づけたのである⁽²⁴⁾。

その後、同郷の宮廷人ポンティキアヌスが訪れた際に、全財産を捨てて砂漠の隠修士となった聖アントニウス（c. 251年～356年）のことがたまたま話題となり、ポンティキアヌスの若い二人の同僚が散歩の途中にトリーア郊外の修道院で聖アントニウスの伝記を読み、突然宮仕えをやめて、聖アントニウスのように生きようと、結婚も止めて、そのまま修道院に残ってしまったという話を聞くことになる。この話は前の話以上にアウグスティヌスに激しい羞恥心を起こさせ、もはやどうしてもいられない精神状態へと彼を追い込んだのである。「聞いたかい。学もない連中が立ちあがって、天国をかつさらってしまったのだ。僕たちはなまじ学がありながら心がないから、どう

だ肉と血の中をころげまわっているではないか。」（VIII, 8, 19）と友に口走って、彼は突然庭に逃げ込むのである。神に従いたい意志とそれに抵抗してこれまでの習慣をそのまま続けようとする意志との間で繰り広げられた内面の闘争の果てに、とうとう涙のうちに「いつまでこの状態が続くのでしょうか」と神に叫ぶことになる。

若い頃にもアウグスティヌスは神に純潔を願ったが、すぐにはそれが与えられないようにと祈ったと語っている。この時はそのような生半かな願いではなく、一刻も早く、中途半端な自己の状態から解放されることを願っているのである。その時、「取れ読め。取れ読め。」という子供の歌声を聞き、聖アントニウスがたまたま聖書の一節を教会で聞いて回心したという話を思い出し、すぐに聖パウロの書を開き、その一節を読んで、それを神の命令として受け入れたのである。それは「宴楽と泥酔、好色と淫乱、争いと妬みを捨てよ。主イエス、キリストを着よ。肉欲を満たすことに心を向けるな」⁽²⁵⁾という箇所であり、もはや何の迷いもなく深い安心感のうちにその言葉に従う決意をしたのである。おそらく彼はパウロの言葉をこの時初めて読んだわけではなかったであろう。しかし、彼がその言葉を自分に対する神の言葉として受け入れるためには時間が必要であったのである。回心するまでの時間は、回心を望みながらそれを決断できないもどかしさから長く感じられるが、回心の時は突然予告なしに到来したのである。

後から考えると、アウグスティヌスの回心は、すべてを捨てて神に従ったという点で、聖アントニウス、ウィクトリヌス、二人の役人の回心と共通するが、彼らの場合には、アウグスティヌスのように、自己の肉欲の習慣がキリスト教への回心の妨げと

して意識されることはなく、あまりにもストレートな決断であるために人々の驚きを呼び、おぼえられたのである。それに対して、アウグスティヌスの場合は、内面的に回心へ至る心のプロセスが時間のなかで反省されている。その点が、他者が他者の回心を記憶する場合と自己が自己の回心を記憶において捉えなおす場合の大きな違いと言える。それにもかかわらず、他人の回心の思い出を聞かなければ自己に向き直って回心することができなかったという彼の記憶こそが、彼に『告白』を書かせたのである。

確かにアウグスティヌスの回心には肉欲が大きく関っているが、彼は肉欲から自由になるために神を信じたのではなく、神を信じることに肉欲から自由になったのである。もし肉欲からの解放が第一の目的であれば、マニ教と何ら変わらないことになる。もともと肉欲は知恵と対立するものとして意識されていたが、自力で肉欲を抑えようとすればするほど、そこから自由になれない自己の無力さを感じざるをえなかった。回心までのアウグスティヌスにとって肉欲は神への回心を阻むものと意識されていたが、実際には自己の弱さの自覚を促し、回心を進める役割も果たしていたのである。すなわち、アウグスティヌスは回心によって、肉欲を自分の弱さとして受け入れ、神の意志にそれをゆだねたのである。そのため、回心後も肉の誘惑は完全になくなったわけではないが、もはや信仰に対立するものではなく⁽²⁶⁾、「肉」も神のあわれみが彼に現れうる場として把握されるようになったのである⁽²⁷⁾。

したがって、彼にとって回心は、肉欲からの解放としてよりも真理である神に自らの意志を一致させることとして捉えられるべきである。真理としての神を求めることは、マニ教の神に対して真の神を求めることであり、すべての真理を照らす根源的な真理として神を愛することであった。自らの罪を罪として理解するに至ったのも、このような真理への方向性からであり、その方向性によってそれに対立する自己の習慣的な傾向が自己に明らかになったのである。真理への方向性を初めに彼に開いたのがホルテンシウス体験であり、真理の在り方を彼に示したのが新プラトン主義であったと言える。

アウグスティヌスは10巻の記憶論で、真理と対立する人間について次のように述べている。「彼らは真理の輝きを愛しますが、真理が自分をとがめる時これを憎みます。彼は欺かれたくありませんが、欺くことは好きですから、真理が真理自身をあらわす時は愛しますが、真理が彼ら自身を曝露する時には憎むのです。そこで真理は彼らに対してこういう仕方では返報するでしょう。すなわち、真理によって曝露されるのを嫌っている彼らを意に反して曝露するとともに、真理自身はその姿を彼らの前にあ

らわさないという仕方です。」(Ⅻ, 23, 34) これは過去の彼自身の姿を語ったものと考えられる。ここには、新プラトン主義には見られない、真理と自己との人格的な関係が語られている。真理は、人間に自己の本当の姿を明らかにするというかたちで迫ってくるものであり、自己が真理を遠ざければ遠ざけるほど、真理は真理から遠ざかった自己を自己に対面させることになるのである。真理を求めても、自己の真実を愛せないかぎり、真理を真理であるかぎり愛することにはならず、真理と真に和解することにはできないのである。

このようにアウグスティヌスにとって回心は、真理である神を自分自身を照らすものとして自ら受け入れて生きることであったのである。それこそ彼にとっては、青春時代に求めた知恵への愛である哲学を実現する生き方であり、回心は彼に哲学と信仰を統合する道を開いたのである。

8. 母の死

その後、ミラノで息子や友人とともにアンブロシウスから洗礼を受け、再びアフリカに戻る船出の前に、ローマのオスティアの河岸で、死後に受ける永遠の生の喜びを母モニカと二人で静かに観想する⁽²⁸⁾。母は、長年祈り求めてきた息子の回心がかねえられ、もはやこの世に何も思い残すことはないと言ひ、その後すぐ病に倒れ、旅先で亡くなるが、その母の最後の願いは、どこに自分を葬るよりも、どこにしようと主の祭壇のもとで母を思い出してほしいということだけだった。もはやこの地上における執着をすべて断ち切って、神のもとに安らかに旅立つ母を見ながら、アウグスティヌスは懸命に悲しみを抑えながらもそれができずに悲しみにくれてしまう。しかし、母の最後の希望をかなえて、キリスト者としての母の生涯を思い起こし、彼の『告白』を読む者が彼とともに彼の両親のことを思い出し、神に彼らの罪のとりなしを祈ることを願って『告白』第一部を終えるのである。

彼の過去の記憶が彼の回心で終わらず、母の死で終わっているのには意味があると思われる。母の思い出は、彼の回心が彼だけが望んで得られたことではなかったことを思い出させるとともに、彼がこれから歩む死への道程を照らすものとなっている。そこにはキリスト者になったばかりの彼の悲しみとキリスト者として人生を生き抜いた熟練者としての母の平安のコントラストが描かれ、普通の主婦として生きた女性のうちにもキリスト者としての輝かしい生き方が現れたことが記憶されている。母モニカはアウグスティヌスの回心によって彼の霊的な母ともなり、彼の『告白』を通して彼と共に教会で記念されることになる。このように彼は自分の記憶を語るに留まらず、

自分と関わった人々の記憶をそこに織り込むことで、彼の人生の記憶に厚みと広がりを与えている。

結局、人がこの世に残すことができる最上のものは、その思い出なのである。思い出によって死者は生きる者の心に生き続けることになるが、信仰者は死者の思い出を神への祈りと変え、永遠との関わりにおいて死者をおぼえるのである。その場合、死者を思い出すことは、この世に生きた死者の過去を思い出すことに留まらず、生きていく者に自己の未来を思い出させることになる。すなわち、死者の罪をとりなすことは、自己にも他者にも隠された心の内奥まで罪が清められ、神の恵みがゆきわたることを願うことであり、生きる者自身の罪の浄化と永遠の至福を願う祈りと一つになるのである。

糸吉

かくして、アウグスティヌスの過去の記憶は、時間のなかで経験した出来事の記憶に留まらず、自らの存在の始めと終わりを永遠において捉えなおすことをめざしたものととなっている。信仰は自己の生きる時を存在の根源に向かう旅路として捉え、時間を超えた次元へと時間のうちに自己の記憶を開いていくのである。アウグスティヌスにおいて、回心は記憶に決定的な意味をもたらしたが、記憶も回心に決定的な役割を果たしていたのである。

- (1) アウグスティヌスは人生の各時期をローマ時代の分類に基づきながらも、創造の六日間と対応させ、幼年期 *infantia*、少年期 *pueritia*、青年期 *adulescentia*（15才から30才）、壮年期 *iuuentus*（30才から45才）、老年期 *senior aetas*（45才から60才）、衰弱期 *deterior aetas* の6つに数え、人類の歴史の6つの時代区分にも関連させる。『真の宗教』第四部26では、人生の6つの自然的年代と霊的年代とが対比されているが、我々の自然の年代における幼年期は「もっぱら肉体の養育が配慮され、成長すると全く忘れられてしまう時期」、少年期は「記憶し始める時期」、青年期は「子孫をつくることがゆるされる時期」、壮年期は「多くの公事に抹殺され、法の下に統治される時期」、老年期は「若干の平和の時期」、衰弱期は「病気になるややすく虚弱な時期」と理解されている。
- (2) X, 2, 2.
- (3) 「あなたから自分について聞くとはい自己を認識することです。」X, 3, 3.
- (4) 「私の過去の悪の告白を読みかつ聞く人々は心をふるい起こし、絶望のうちにまどろみながら、おれ

記憶における回心（小川）

- はもうだめだなどということなく、かえってあなたのあわれみと恵みに対する愛のうちに目を覚まします」X, 3, 4.
- (5) X, 4, 5. アウグスティヌスはここですでに教会に属する現在の自分について告白する意味を考察しているのである。
- (6) 「私は誰に向かってこんなことを話しているのでしょうか。神よ、あなたに向かってではありません。御許において、私の同族に、すなわち人類に向かって話しているのです。・・・では何のために。それは私とまた誰であれ、これを読む人が自分たちはいかに深い淵からあなたに叫ばなければならないかを考えるためです」II, 3, 5.
- (7) X, 19, 28. ここには「忘却の忘却」があると言える。記憶があったはずなのに、記憶の内容が全く思い出せない場合である。
- (8) 「私の幼年時代はとつくの昔に死んでしまったのに、しかも私は生きている」I, 6, 9.
- (9) I, 6, 9. (10) I, 6, 8. (11) I, 8, 13.
- (12) I, 7, 11. (13) I, 16, 26. (14) I, 13, 19.
- (15) 「マタイ福音書」19章 14, 「マルコ福音書」10章 14, 「ルカ福音書」18章 16.
- (16) I, 19, 30. (17) III, 2, 4. (18) III, 7, 12.
- (19) III, 7, 12, IV, 15, 24, VII, 1, 1-2. (20) VII, 5, 7, VII, 7, 11.
- (21) VII, 10, 16. (22) VII, 21, 27.
- (23) 「そのころ私は罪を犯すのは自分ではなくて、自分のうちに存在する何か知らないが、ある別の本性の者であると思っていました。そして罪の責任をまねがれているということが、自分の傲慢な心に満足を与えました。」V, 10, 18.
- (24) VIII, 5, 10. (25) 「ローマ人への手紙」13章 13-14.
- (26) X, 30, 41. (27) X, 34, 53. (28) IX, 10, 23.

テキストの文章は主に山田晶訳『アウグスティヌス 告白』（中央公論社 世界の名著16）に基づき、一部言葉を変えたところもある。